

県中教育

随想



県中教育事務所長 梅田 善幸

子どもたちの「ゆめ」、保護者の願いが

かなう教育のために

今、私は、各学校を回り、授業を見たり、学校経営についての現状や課題について話を聞いたりしています。その中で、子どもたちが明るく、元気に学ぶ姿や先生方がイキイキと子どもたちのために授業等で努力している姿を見ることはうれしいことです。また、各校には各校なりの課題もあり、それを明確に把握し、様々な手立てを講じて、解決を図ろうとしている校長先生、教頭先生はじめ先生方の姿に期待しています。

さて、子どもたちには、ハードルは高くても、実現不可能ではない、そんな夢を抱き、挑戦してほしいと思います。そのための基盤整備が我々教育関係者はもとより、保護者、社会の役目です。

豊かな心の育成、確かな学力

の向上、健やかな体の育成を目指した知・徳・体のバランスのとれた子どもを育てることが、夢の実現のためには大事であり、そのためにやるべきことを一つ一つ丁寧に実行していく必要があります。道徳教育の充実、生徒指導の充実、授業の改善・充実、学びの基盤づくり、幼小中の連携、食育・健康教育の推進など、様々な点から、子どもたちの「ゆめ」、保護者の願いがかなう教育を支援していきたいと考えます。

また、「ゆめ」の実現のためには、本物に触れさせることが大切です。あこがれのスポーツ選手とか、あこがれの職業で活躍している人とか、それぞれの分野の本物と触れ合う機会をもつことによって、子ども自身が将来のモデルとして捉え、自分の

目指したい到達点を知り、意欲を引き出すことにつながるものだと思います。

さらに、努力することによって成果を得て、努力することが楽しくなれば、人は、ますます成長していけるものです。勉強でも、スポーツでも、何でもそうだと思います。そういうことも踏まえながら、私たち教育関係者、保護者、地域社会が子どもたちに関わっていければと考えます。

本事務所の指導の重点である「子どもの『ゆめ』、保護者の願いがかなう教育」の実現のため、社会と一体となって取り組んでいきたいと思えます。



編集・発行 福島県教育庁県中教育事務所
発行責任者 梅田 善幸
編集協力 県中市町村教委連各支会
県中各地区小中学校長協議会

異文化に触れて思うこと



天栄村教育委員会 教育長 増子 清一

私には現在三人の孫がいる。今年の六月には次女が出産予定で四人になる。普通と違うのは三人の孫はアメリカで暮らすハーフということである。昨年の暮れに初めてアメリカに行く機会があった。当たり前だが日本とは全然違う。私には自由なイメージのアメリカだったが行ってみればルールで守られる、ある意味で不自由な国であると感じた。学校はどうなのか興味があり、娘に話を聞いてみると、アメリカの学校で学ばせているお母さんが懇談会等で、先生から家庭での躾や指導でこんな点があまういのではないかと具体的にはつきりと指摘され、びっくりしたと言っていた。日本でそんなことを先生が言ったら「あの先生は最悪」のレッテルを貼られてしまいそうである。

私には現在三人の孫がいる。今年の六月には次女が出産予定で四人になる。普通と違うのは三人の孫はアメリカで暮らすハーフということである。昨年の暮れに初めてアメリカに行く機会があった。当たり前だが日本とは全然違う。私には自由なイメージのアメリカだったが行ってみればルールで守られる、ある意味で不自由な国であると感じた。学校はどうなのか興味があり、娘に話を聞いてみると、アメリカの学校で学ばせているお母さんが懇談会等で、先生から家庭での躾や指導でこんな点があまういのではないかと具体的にはつきりと指摘され、びっくりしたと言っていた。日本でそんなことを先生が言ったら「あの先生は最悪」のレッテルを貼られてしまいそうである。

日本では親の人格を傷つけないように言葉を選び、回りくどく話をする。保護者も多様化し、価値観も考え方もそれぞれで、今までの日本的な言い方では伝わらないことも最近が多くあるように思う。アメリカのような先生の対応も必要になってきたのか。しかし、それで良くなることも考えにくい。私たちには地域に根付いてきた素晴らしいコミュニケーションの技術がある。豊かな人間関係の中で、子どもたちの育ちを見守り導いていきたいものである。

教育問題は決まりをつくるだけでは解決しない。最近の国の教育施策は法律という決まりでことが解決できると言っているように思えてならない。学校現場はなおざりにされ、いつの間にかいろいろなことが決まってくる。現場の実態等をしっかりと見て欲しいものである。もっと人間の根底にあるものを大切にしたい施策はないものなのか。学力向上も道徳の問題もいじめも子どもと関わる私たちの生き方の問題なのではないかと思う。もうすぐ生まれる四番目の孫は多くの大人との関わりの中で、立派な日本人としてすくすくと育って欲しいものだ。今から楽しみである。

地域支援ネットワークに

支えられた特別支援教育

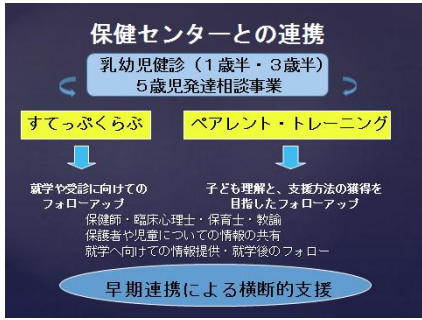
一人ひとりの笑顔のために

三春町立三春小学校

支援ニーズをもつ児童が多数在籍する本校では、幼稚園・保育所から適切な支援を受け成長している子どもたち「一人ひとりの笑顔」を、責任をもって中学校へつなぐことを、最大の目標に掲げています。

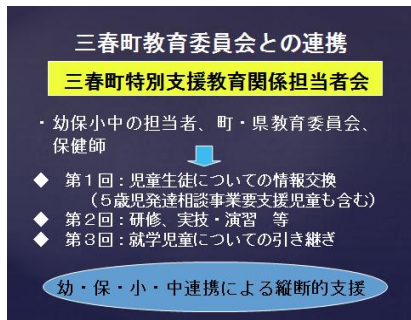
子どもたちが、二次障がいや不登校といったヘルプサインを出してからの『後追い』の支援ではなく、目の前の子どもたちの困り感に寄り添った『先取り』の支援をするためには、『顔の見える連携』と、『支援策の実践的な引継ぎ』が重要です。

そこで、保健センターや町教育委員会との連携を図っています。



【図1】

支援が線でつながるのではなく、みんなが輪になって、子どもと家族を丸く囲んでつながっていく。そうすることで、保護者の安心した子育てが可能となり、子どもたちの笑顔を曇らせ



【図2】

す。三春町では、子育て支援の一環として「五歳児発達相談事業」を実施しています。本校では、健診のフォローアップ事業（親子教室等）として、特別支援教育コーディネーターがスタッフの一人として参加し、子どもたちや保護者と直接関わり、就学を見据えた家族支援の援助や就学後のフォローアップを進めています。（図1）

また、教育委員会主催の「特別支援教育関係担当者会」では情報の共有、「個別の支援計画」による支援の引き継ぎ等を行っています。（図2）

ることなく輝かせ続けられると実感しています。（図3）

地域支援ネットワークに支えられた特別支援教育は、「ユニバーサルデザイン」の考えによる分かる・できる・楽しい授業づくり」に発展しました。「特別支援教育」と「教科教育」は車の両輪。インクルーシブ教育の実現に向け、町全体で研修を深めています。



【図3】

挑戦する工業高校生

JSEC二〇二三への取り組み

福島県立郡山北工業高等学校

昨年度、本校の化学工学科三年の生徒三名は、ゴミとして捨てられているトマトの茎・葉を原料とした果物の鮮度を保つ働きを持つ紙製容器を開発する研究に取り組みました。この研究成果を、高校生科学技術チャレンジ（JSEC）に応募しま

した。JSECは、二〇〇三年から行われている全国規模の科学技術の自由研究コンテストです。昨年度は、全国から二二二件の応募があり、最終審査には本校生の研究を含む三〇件が選出されました。

最終審査では、会場に指導教員は入室できず、別会場の大型モニターで生徒が審査に臨む様子を見守りました。審査中、大学教授や協賛企業の研究員等から、研究内容はもとより、研究に臨む姿勢、データの評価方法、今後の研究の見通しに至るまで、高度な内容の質問を浴びせられました。また、研究の完成度はもちろんですが、研究に取り組むメンバーのプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力等、多面的に評価されました。

本校生は、最終審査独特の雰囲気、臆することなく、研究内容について堂々と説明をし、質問に対して、客観的な評価に耐えうるデータをを用いて、議論をしてい



【表彰式の様子】

ました。

最終審査の結果、県内の高校生として初めての入賞となる、「テレビ朝日特別奨励賞」を受賞しました。

この研究に取り組んだ生徒達は、仲間と協力しながら、自分の力で課題を解決しようという姿勢と、研究内容を掘り下げることを通して、思考力・判断力・表現力を身に付けたと考えています。ここに紹介した生徒達は、本校生の中で特別な存在ではありません。しかしながら、科学技術研究に関するコンテストで前述のような成績を残しました。このことは、工業高校生の持つ一つの可能性を示しているのではないのでしょうか。

今後とも、失敗を恐れず、さまざまなことに果敢にチャレンジする、たくましい工業人を育てていきたいと考えています。



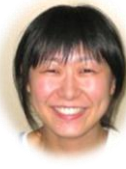
【パネル展示の様子】

初任者紹介

新採用三か月を過ぎても

三か月を振り返って

三春町立岩江幼稚園



教諭 菅野 琴恵

幼稚園教諭として働き始めて早や三か月が過ぎました。優しく頼れる先生方とかわいい子どもたちに囲まれて毎日を過ごしています。恵まれた環境で保育者の道を歩み出せたこと、とても嬉しく思います。

しかし、この三か月は保育の楽しさを感じるとともに、己の未熟さを痛感する日々でもありました。常に失敗と反省の繰り返しで改善へとなげることができず、充実した保育ができていたとは正直言えません。そんな中でも子どもたちは私のことを「先生」と呼んで集まってくれます。保育者はとても重要な役割を担っていることが改めて分かり、私にはまだまだ足りないものが多くあるのだと思います。至らない点は多くありますが、これから多くのことを吸収して己の成長へとつなげていきたいと思えます。そして子どもたちが大人になった時、「こんな先生もいたな」と思い出してもらえよう保育者を目指したいと思います。

新採用三か月を過ぎて

郡山市立桑野小学校



教諭 松本真沙希

小学校時代の恩師に憧れ、ずっとなりたいと思っていた小学校教員。あつという間に三か月が過ぎました。無限の可能性を持ち、日々成長を続ける子どもたち。毎日がとても充実していて、その成長や頑張りへの感動、涙がこぼれたこともありました。

着任した当初は右も左も分からずに、慣れない仕事や想像を超える仕事の量に、戸惑い、不安な日々を過ごしました。そんなときに助けてくださったのが先輩の先生方でした。先輩方を見習い、自分のできる仕事を少しずつ増やしていきたいと思えます。

一方、子どもたちとの時間は本当に貴重だと感じています。小さな成長に気づいたり、できなかったことができるようになった瞬間に立ちあつたりしたときに、教師になつてよかったと心から思います。そのかけがえのない瞬間を少しでも多く見ることができるよう、私自身も子どもたちと共に日々成長していきたいと思えます。

新採用教員としての三か月

古殿町立古殿中学校



教諭 星 沙智

新採用教員として古殿中学校に着任してから、あつという間に三か月が過ぎました。着任当初は、新しい環境に慣れることに精一杯で、毎日慌ただしく生活していました。しかし、三か月が過ぎた今、学校生活にもだいぶ慣れ、先生方や生徒たちとコミュニケーションをとりながら、楽しく笑顔で充実した毎日を送っています。

本校の生徒はとても素直で何事にも一生懸命に取り組むため、「もつと沢山のことを教えたい」という気持ちになります。私自身も生徒達に「もつと沢山のことを知りたい」と思わせるような授業を行うために、日々先生方、生徒から学ぶ姿勢を怠れず、失敗を恐れずに様々なことに挑戦し、教師としての資質の向上に努めていきたいと思えます。また、この恵まれた環境の中で初任者として仕事ができることに感謝し、先生方、保護者の方々、地域の方々や協力して心豊か

たくましい生徒の育成に尽力していきたいと思えます。

多くを吸収して

あぶくま養護学校



教諭 飯田里佳子

夢だった特別支援学校教諭として働き始めてから、三か月が経とうとしています。大学を卒業したばかりで分らないことだらけですが、あぶくま養護学校の先生方の温かいご指導、同期の先生方との支え合い、そしてなにより子どもたちが見せてくれる笑顔で、毎日充実した日々を送っています。

私には、自分のモットーとしていた言葉があります。「粗探しよりも宝探しの教育」です。誰しも苦手なことはありますが、そればかりに目を向けるのではなく、得意なことや長所を見つけて、誉めたり伸ばしたりすることができよう教員になれるかと考えています。そのためにも、子どもに寄り添いながら、具体的な支援の方法など、自分の教員としての資質を高めていきたいです。初任者研修のこの一年間は、それに向けた土台作りであると思えます。個性豊かな子どもたち一人一人に向き合えるような、広くて固い土台を作っていきたいです。

作っていきたいです。

新採用三か月を過ぎて

天栄村立湯本小学校



養護教諭 佐藤 綾佳

新規採用教員として天栄村立湯本小学校に着任してから早くも三か月が過ぎました。四月の入学式から始まり、健康診断、授業参観、運動会とめまぐるしく過ぎたように感じます。

本校は、全校児童二十二名のへき地校です。教育活動や学校行事等でも大自然に恵まれた地域に密着したものが数多くあります。それらの活動を通して、子どもたちが五感を使って学び、地域への思いを育む姿からは、私自身も学ぶことがあります。

また、地域の方々が「子どもたちのために」と様々な場面で協力してくださり、「子どもは宝」なのだ改めて感じています。私たち教員はその「宝」一人一人を輝かせるという、やりがいと責任のある立場であることを改めて認識しました。

子どもたちが自らの心と体に関心を持ち、管理できる力の育成を目指し、養護教諭としての専門性を高めながら、私にしかできない保健室経営に取り組みたいと思えます。

総務社会教育課
社会教育担当より

「子どもの夢をはぐくむ読書活動推進事業・読書活動支援者育成事業」

本事業は、地域で子どもの読書活動を推進するボランティアの拡大及び資質向上を目的とし、県の重点事業として今年度よりスタートしました。

この事業は、初心者を対象として一日開催する「人材育成基礎研修（研修A）」と、現在活動をしている経験者を対象として二日間開催する「ステップアップ研修（研修B）」からなり、六月十三日（金）に研修Aを開催いたしました。

福島大学名誉教授の高野保夫氏による講演、出版文化産業振興財団（J P I C）読書アドバイザーの宇野君代さんによる、読み聞かせの技術が高まる演習、そして最後に、安積第三小学校の司書補、菊地明恵さんとボランティア代表、佐藤明子さんによる事例発表を行いました。

講座を受講された皆様につきましては、読み聞かせや学校図書館の環境整備等、読書活動推進のための活躍の場が広がり、機会が充実するよう各教育委員会に働きかけていきたいと考えています。

「親子の学び応援講座」
について

今年度より、本県の家庭教育推進上の大きな課題である「親の学び」を支援するためのPTAと連携した「親子の学び応援講座」事業を実施します。県中地区では、三つのPTAで活動を展開します。

【事業内容】

○テーマの設定

それぞれのPTAが抱えている家庭教育に関する課題からテーマを設定します。

○家庭教育講座の開催

テーマに即した講演を普段なかなか聞くことができないような県外の大学教授から伺うこともできます。

○家庭での実践

親子で話し合った取組を家庭で実践します。県が作成するチャレンジカードを活用することも可能です。

○実践の振り返り

家庭での様子や成果等について親同士で話し合う機会を設定し、振り返ります。

今年度の実践PTAでの講座や活動の様子について、今後紹介して参りますので、県のチャレンジカードの活用と併せて、各PTAでの活動の参考としていただければと思います。



学校教育課管理担当より

「不祥事根絶」に向けて

「職場の雰囲気づくりの大切さを改めて感じた。日常の教職員一人ひとりへの言葉かけを通して、良好な人間関係を築いていきたい。」

六月二日、学校事故防止対策研究協議会に参加した教頭先生の声には、多忙な中にもあっても、自他の健康に留意し学校全体でメンタルヘルスを推進していかうとする強い決意が込められていました。

教職員の不祥事による懲戒処分は、二十五件と前年度比で八件の減少ですが、免職処分は六件あり、依然として悪質かつ重大な非遵行行為は続いています。県教育委員会では、四月に「信頼される学校づくりを職場の力で」を改訂し、新たに研修用事例集を掲載しました。教育事務所では所長訪問時に所長が直接教職員の皆様に説明する時間を設定しました。校内服務倫理委員会等を中心に、具体的かつ実効ある取組に積極的に活用していただきたいと思います。

風通しのよい、働きがいのある職場環境や人間関係づくりが、教職員一人ひとりに反映され、充実した教育活動が展開できるよう、学校や教育委員会との一体感を大切にしながら危機管理意識の高揚と不祥事根絶に努めて参ります。

学校教育課指導担当より

学力向上通信「つなぐ」を
発行しました

県中教育事務所では、今年度学力向上通信「つなぐ」を作成することとし、第一号を五月二十九日に、第二号を七月一日にそれぞれ発行しました。

この通信は、域内の各小中学校と県中教育事務所との連携の一助となるようにとの、願いを込めて作成したものです。

通信の中では、研修会の様子の紹介や、参考となる情報の発信・提供に努めていきたいと考えております。

第一号では、「授業改善チェックシート」と「活用法」を添付しました。授業改善にぜひ活用ください。また、第二号では、定着確認シート活用例の紹介を掲載しましたので、参考にしてくださいと思います。

授業についてのお悩みやご苦労されていることなど、先生方の要望に応えられるよう、内容を充実させていきたいと思っておりますので、ご意見、ご質問をお寄せ頂きたいと思っております。

なお、通信は、県中教育事務所ホームページからご覧いただけます。また、チェックシートもダウンロードできます。



ふくしま道徳教育資料集
について

福島県教育委員会では、ふくしま道徳教育資料集を作成しています。

「いのち」をテーマに編集された「第一集 生きぬく・いのち」、そして、家族愛や友情等を中心とした「第二集 敬愛・つながる思い」が発刊され、さらに今年度は、「第三集 郷土愛・ふくしまの未来へ」（仮称）が作成される予定です。震災を経験した福島の子どもたちだからこそ、大切にしていきたい内容の読み物資料、教材となっています。

これらの資料集を積極的に生かし、子どもたちの心に響くたくさんの授業実践が展開されるよう各学校で活用を図っていただきますよう、よろしくお願いたします。

